
ハーフウェイ・ビレッジの丘の上で

兵衛婚・怜汰須

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハーフウェイ・ビレッジの丘の上で

【Zコード】

Z9741L

【作者名】

兵衛婚・怜汰須

【あらすじ】

青年期の悩みや躊躇で立ち往生した若者達が集う場所『ハーフウェイ・ビレッジ』

そこに突然わけもわからず連れてこられた主人公達。

初めは反発していたものの、何故連れてこられたのかを考え、次第に自分自身と正面から向き合うようになっていく。

主人公や仲間達の成長、そして過去へのけじめと思い出への決別。

“世界”の壁を越えて交錯する想い。

『中途に立ちどまりし者が集う場所』で、自らの生きる道を模索し

ついで若者達の物語。

第一章 中途に立たされた者（前書き）

新参者です。

真面目過ぎずふざけ過ぎを心がけているのですが、いつもヒカル
け成分高めかもしません(汗)

第一章 中途に立ち止まりし者

いきなりな展開って、いつこう事を言つんだろ。

「どうしてこうなった・・・・?」

朝、いつもと変わらぬ調子で起床した俺。

起きぬけの身体で伸びをして、しおぼつぐ目をさす。

両手を組んで、背伸びの運動。1、2、3、4・。

瞳を開けたら、あら不思議。

「うはははは？」

ちゅつとちゅつとちゅつと。

なんかおかしくないっすか先輩？

つて先輩つて誰だよ。

思わず変なテンションで一人漫才をおっぱじめてしまつほど、今の俺は混乱しているようだ。

だつて・・・・や。

夜寝る前に見た天井は身飽きた木目の並ぶ木の天井だつたはずなのに、今俺の目に映つているのはどう見ても木製には見えない壁紙の

貼られた天井だった。

そして見回してみると、控えめサイズの部屋の中にあるのは簡素な机に本棚、そして俺が寝てるベッド。だけ。

昨日まで散乱していたはずの漫画本やら学校の教科書やノートやらは一つとして見当たらなかつた。

明らかにここは俺の部屋じゃない。

「これって、まさか……ね」

顔面のあたりがすうっと冷たくなるのを感じながら、俺は薄いカーテンのかかつた窓から外を見た。

まあ当然と言えば当然なんだが、窓を通して見る事ができたのはお向かいさんのいつもの和風な屋敷じゃなかつた。

「…………何だこれ」

窓の外に広がっていたのは、広大なグラウンドにいくつつかの特徴的な建物。

そう。外壁に巨大な時計が掛けられている、あの建物……。

「…………学校？」

「こりはどこかの学校なのか？」

少なくとも俺が通っている学校とは全然違うようだが……。

て、そういう問題でもないんだけど。

「そもそも朝起きたら学校にいたつていう状況 자체おかしいだろ？
が」

初めはバリバリ起きぬけ状態でぼおっとしていた頭が段々と覚醒してきてたので、俺はこの状況について冷静に考え始める事にした。

そもそも、いやマジで根本的な疑問なんだが・・・なんでこんな事になつたんだね？

昨日の夜、俺はいつも通り部屋で特にする事もなく、漫画をパラ読みしたりうだうだして過ごしていた。

そしてこれまたいつもの通り、研磨剤入り&ミント風味のこだわりの歯磨き粉で歯を磨いて布団に入つた。

これといって変わった事はなかつたはずだ。とりあえずそこに『ダメ人間か』とか呟くのよそつか。

「あ、もしかして」

俺に愛想を飞かした家族（主に俺を毛嫌いしてる妹）が俺を家から出してこんな所に閉じ込めたとか・・・

いや、家族だけじゃない。しらないおじさんガ俺を連れ去った可能性もあるわけだ。

拉致？誘拐？ 寝てる間にここに運び込まれたというわけか？

それとも、実は俺は夢遊病患者で寝たまま自分で歩いてこりこり・・・
?

・・・・・・・

「冷静に考えてもアホな結論しか出てこないのな

どつせいか、この異常な状況下にあっても、俺の脳味噌は以前のまま
変わつていなこよつだ。

どつじか、はつめりしている事が一つある。

「このままこじてたら、まずこ

数分後にもこの部屋に変なおじさん達が乱入してきて俺に危害を加
えないとも限らないじゃ ないか！

俺は逃げるぜ。ばーい。

俺は布団から這い出ると、ベッドの下に置いてあつた自分のスニーカーをつっかけて部屋のドアを開けた。

部屋の外の廊下には誰もいなかつた。

いかにも学生寮といった風な佇まいと、あまり大きな建物ではなさ
そうだった。

小走りに廊下を進んで行くと、下へ降りる階段を見つけた。

だ。他の壁の壁紙には、せひ、

俺は1階を田指して急ぎ足で階段を下り進んでいく。

タタタタタツと駆け下りた先には、玄関があつた。

外界の明るい光が差し込んでいく。

どうやら逃げられそうだ。

よ、しゃあ！これで俺は自由だ！」ハリーハムなんたおりー！」

外に出た喜びに、またもやテンションがおかしくなる俺だが、次の瞬間絶望的な現実に打ちのめされることとなる。

そう、屋外への脱出に成功した俺がこの学校的敷地外へ出る道を探そうと周囲を見回した時だつた。

一
え

グラウンドや校舎の周りを囲む高く厚い壁。

そう。一分の隙もなくこの学校は壇で囲まれていたのだ。

脱出不可能な要塞の如く。

「ねえ、嘘でしょー? 嘘つて言つてよねえええ!」

全身を襲う倦怠感と脱力感。逃れられない現実に思いがけず涙腺が緩む。

俺は地面に突つ伏して泣いた。

•
•
•
•
•
•

・・・しかしまだあきらめるわけにはいかないっ！

「俺には・・・やり残したことがあるつ

涙を拭いて、顔を上げる。

俺は眼前にそびえる高い塙をにらんだ。

人間に不言能と云ふ言葉はありて常に自分の口能性をせはめてきた

ならば俺は、お手で儲しから、己は不可能などないと

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର ପରିଚୟ

そして力強く大地を蹴り、
壙に至る寸前で踏み切り、重力への反逆

「...」ひむせひびきあわせ

・・・悲しいかな、手足に吸盤が付いているわけでもなければ、登攀の訓練などした事もない俺には、ツルツルのコンクリート壙に食らいつく手段がなかつた。

無残にも跳ね返される俺の身体。一瞬の反逆の後、再び俺を支配する重力。

後頭部と背中に強い痛みを感じた時には、俺は地面に大の字になり天を仰いでいた。

「な・・・なんてこいつた・・・」

脱出は失敗に終わった。

どうやら俺は、完全にこの学校の敷地内に閉じ込められてしまったらしい。

「それも一人でか？こんな所に？」

自分の不運を呪うしかないな。

しかしその時、嘆いている俺の背後から誰かの声がした。

少し高めな、とつと透き通った声。

「ひとりじゃないわよ」

「つまつ」

俺はおどろいて振り返る。そこには一人の女の子がいた。

ショートスタイルの髪をさらりと揺らし、自信に満ちた様子で近づいてくる。

「何をそんなに驚いてんのよ。私はさつきからずっとここにいたのに

彼女は端正な顔に小馬鹿にしたような表情を浮かべ、くすりと笑いながら言った。

わざわざからいたと聞いて、俺には気になる事があった。

すなわち、やきほどの俺のみじめな一人コントを見られてしまったのか・・・といつ事だが。

「えーと・・・いつぐらいでここに来たのかな?」

「え? どうの意味?」

まじめになくなつた俺は、直接的な聞き方で問いただす。

「どうから見てたのかつてことだよつー」

「ああ・・・そういう事ね。安心して。『ふわふわふわわつー』はしつかりと見てたわ」

・・・終わつた。

お父さん。お母さん。今までありがとうございました。

わずかな思い出を胸に、僕は今、イデアの世界へ旅立ちます・・・。

「うふ、うふ」と一何死のうじてんのよー。」

「うふせーーあんな生き恥を人にわらひして、僕はもう生きてゆかれ

んっ！」

「いいからー手を自分の首から離しなさいってのー。」

「死なせてくだしえーつー！」じょーですだあーつ！」

「いいかげんに・・・・しりおつー。」

刹那、目の前に白い何かが高速で迫り、顎に強い衝撃が走った。

華麗な一撃に脳を揺らされ、白い物体の正体が女の子の拳だったと氣付く頃には、俺の意識は途絶えていた。

・・・・・

・・・・・

ん・・・・・。

こゝは・・・・・。

がばっ。

俺は布団をはねのけて起き上がった。

目をこすった後、恒例の背伸びの運動は割愛して急いで周囲を確認した。

「え？」

とりあえず、やつをまでの出来””とが夢でなかつた事が確定した。と、いうのも俺が目覚めた場所はまたもや俺の自室とは違ひ、どこか別の部屋だつたからだ。

そして俺の目の前には何人かの人人がいた。

まだ焦点の定まらない俺の視界では詳細がわからないが、皆こっちを見ているようだ。

・・・そうか。女の子に殴られて倒れた俺を看病してくれてたのか。

俺は彼らにお礼を言つべく、話しかけようとした。が、次の瞬間。

「気が付いたの！？大丈夫！？」

どこかで聞いたような声が耳に飛び込んできた。

そして俺の眼前にものすゞい勢いで迫つてくる者がいた。

「！ あんたは、やつきの・・・！」

何が起きたのかよくわからなかつた。

ただ、気が付いたらさつき俺を殴つた少女が、マウントポジションとでも言つべき姿勢で俺の上に覆いかぶさり、心配そうな表情で俺の顔を覗き込んでいたのだ。

所謂「吐息がかかる距離」だ。おこいりひみつと待てよ。

「わつわざいめんなわこーまさか倒れるとは思わなくて・・・」

「あ、いや別に・・・」

なんだつて俺はこんな所で女の子に覆いかぶさられてるんだ?

展開が予想外すぎる。変な気分とか以前に狼狽してしまってまともな反応を返せない。

「どこか痛む所ない?これいくつに見える?」

彼女は俺の眼前に指を一本出して聞いた。

・・・・・

・・・といつあえずこの子が俺の事を心配してたつてのはよくわかつたよ。

俺は段々と落ちつきを取り戻していく。

もともと田舎から淡泊な人間を自負している俺は、女の子にマウントを取られたらくらいでペースを乱されるようなタマじやないのだ。

まったくらしくなかつた。

本来の俺はテレビの音を右耳から左耳に受け流し、漫画を読むというよじかは漫画と顔の間にある空気を眺めて毎日うだうだしてるだけの何の面白みもない駄目人間なんだよ。

「一本。だから俺の上から降りてくれ」

瞬間、彼女の表情が一変した。

「！ きやあつ！ ヘンタイヘンタイヘンタイ

今さら何を恥ずかしがっているのか赤面して取り乱す彼女。
あう」とかわつきましたで謝罪していた相手に対し再びめちゃめちゃに拳を振るい始めた。

ぐ・ぐ・ぐ一度も食らってたまるか。

俺は首から上を巧みに動かしかわし続ける。

ひとしきつぼふぼふとベッドを叩いたこいつは、疲れた表情でマウントポジションから俺を解放した。

「あ～もう。まさかこんな所で男の人には襲われるとは思わなかつたわ」

「誰も襲つてねえよ。寧ろ俺が襲われたわ」

「なんつですつてえ！？ もとほといえまあんたが・・・」

次の瞬間、男の声が部屋に響いて俺達の議論（？）は途切れた。

「あの、夫婦漫才はそのへんでいいかな？ 聞きたい事があるんだ」

「あ・・・」

そういうえばこの部屋に他にも人がいた事を忘れていた。

俺とこのアホ娘を除いて、2人。

一人は今発言した男で、もう一人はアホと大して年恰好の変わらない女の子だった。

「とつてもおもしろかったですよ。わたしファンになっちゃう

う」
その子はくりくりした目を輝かせてこちらを見ている。いや、漫才じゃないんだけどね。

まあ・・・」
うちは比較的ニンゲンが丸そうでよかったです。

「・・・君も、朝起きたらここにいたというパターンかい？」

さつきの男が聞いてきた。

「そ、それが一体どういう事なのか知ってる人いないか？」

男はキザなポーズで手を広げて首を横に振った。

「・・・残念ながら」

「みんな同じみたいですねえ。わたしも今朝起きたらお部屋が変わつてびっくりしました」

のんきにアハハとか笑いながらくつくりの女の子が言つ。

「やういえばそこ」のカノジョから、君が脱出を試みたと聞いたんだ
が

「その結果がこれだけね」

すっかり最初に会った時の調子を取り戻したアホが、俺が寝てるベッドを指差して言つた。

「お前が殴つたからだろうがつ！」

「ま、まあまあ。女性を怒鳴るもんじやないよ・・・」仲裁に入るキザ男。

・・・ったく。とんでもないアホ女だ。

その時、また聞き覚えのない声が会話に割り込んできた。

「みなさん、お田覚めのよつですね」

「・・・・・」

皆が振り向いて声の主を見た。

ま、また誰か出てきたのか・・・。

そこにはさぞう見ても中学生にしか見えない容姿にタイトスカートの女性用スーツを着込んだアンバランスな外見の少女が立っていた。

直立不動の姿勢でビシツと立つていて、ツインテールに結んだ髪の毛が少しも揺れていない。

まだあどけない顔の彼女は無表情で俺達全員を見据えていた。

雰囲気から察するに、おそらくこのステッスの少女がこの状況について説明する役割を担つてゐるんだな。

「ハーフウェイ・ビレッジによつて。あなたたちは今日からこの学校の生徒です」

無表情でステッス少女が言葉を発した。

が、言つてる事がよくわからない。

「・・・はーふうえい・・・びれつじ・・・？」

「はい。あなた達は望む物を手に入れる為、自分の意志でここにきました」

「・・・何言つてんだこいつ。

アホが早速食つてかかった。

「ちよつと待ちなさいよ。私はこんなヘンテコな学校に来たいなんて思つた事はないわ。朝起きたらここに連れてこられていただけよ」

キザ男も続く。

「・・・確かに、『ハーフウェイ・ビレッジ』なんていう名前すら

知らなかつたしね

ステッ少女は反論されても動じず、淀みのない口調でぱぱじつと囁つた。

「でもあなた達には望むものがあるでしょう。」私はそんな望みを実現するための場所です

・・・望むもの・・・

俺の・・・望むもの・・だつて・・・?

周囲を見ると、皆もわけがわからなくなつたのか、渋い顔で首をかしげていた。

「今はまだわからないかも知れません。でもあなた達は心のどこか深層で悩みや望みを抱えていて、その感情が持つエネルギーによってここへ導かれたのです」

くつくつのナガロをはさむ。

「え？ と・・・、じゃあ、わたし達はいつ元に戻れるんですか？」

それは俺も気になる所だ。

「脱出を阻止するよつた壙まで建ててあつたぞ。これは立派な監禁なんぢやないか？」

すると、それまで無表情だったステッ少女が、ムツとしたよつて面をひそめて反論した。

「別に、堺の外に出たいなら出して差しあげてもかまいませんよ?
・・・ただハーフウェイ・ビレッジがあるこの異世界の領域は堺
の所まで終わっているので最悪あなた達の存在が消滅する結果に
なりますが」

「い、異世界い？」

おーおいこんじはファンタジーかよ。

「ここから出る方法はただ一つ。あなた達が自分自身を理解し、望
むものを手に入れれば、ここにいる理由がなくなり元の世界に戻る
事ができます」

「・・・や、それまでは・・?」

くつくつのナガ不安そうに聞いた。

「それまでは、ここに生徒としてここで生活していただきます」

すると、アホが切れた。

「・・・つやっけんじゃないわよーーー！」

そして猛烈な勢いでスーシ少女に迫っていく。

スーシ少女は少しも動じず、じっとアホを見つめている。

俺の脳裏に、ややほゞの脳震盪の記憶が蘇る。

小柄なステッ少女に対し明らかに体格的優位にあるアホ。

俺はさすがにまずいと思い止めに入らうとした・・・が。

「！？」

次の瞬間、アホが空中で高速回転し、ぼすっとこう軽い音とともに仰向けの状態で床に軟着陸した。

「え・・・・・・」

さつきと同じ無表情で、何事もなかつたかのように立っているステッ少女。

彼女が華麗な背負い投げでアホを投げ飛ばしたのだと数秒遅れて気付いた。

「！」・・・！」のまつ・・・・・

すでに勝敗は喫しているのに床でじたばたともがいているアホ。

「・・・・・暴力反対です」

涼しい表情に少し物憂げな目をして、ステッ少女が呟いた。

いや、たつたいまアナタ自身が暴力をふるつたじやないですか・・・。

「自らの身に危機が迫った場合の防衛行動は正当なものです。どこの法治国家においても正当防衛の権利は認められていますので」

自分に向けられた視線の意味を理解してか、スーツ少女はさりと
言った。

アホは憤懣やるかたないといつた雰囲気で身体についた埃を払いな
がら立ちあがると

「こんな所絶対脱出してやるんだからっ！」

とか怒鳴り乱暴にドアを開閉して出て行つた。

・・・・・

思わずため息が出る。

「・・・俺だつて何がなんだかわからんねえつてのこあのアホは・・・

・

「僕もさ・・・」とキザ。

「わたし・・・もうダメえ・・・」

くつくつの声にいたつてはもうお疲れの様子。

そんな俺達の様子を見たスーツ少女は

「私はあなた達がここを出る・・・“卒業”するまで、ガイドとしてお手伝いさせて頂きます。“サクラ”とお呼び下さー」

とだけ言つと、身を翻してわざと部屋から出て行つた。

しばらくの間、俺達は無言のまま考え込んでいた。

あの女の子・・・サクラは、俺達が自分で望んでここに来たと言つていた。

望みをかなえるためにここに来たとも。

それなら、俺は・・・何を望んでここに来たのだろう。

確かに、俺は欲しい物なんて何もないなんていつ聖者のような人間じゃない。

けれど、サクラの言つ「望む物」とこのまま、きっと金とか名譽とか女とかそんな物じゃないのだろう。

俺は今一度周りを見わたす。

そう。

ここは学校。

学校・・・『望むもの』・・・。

「まともった・・・かな・・・?」

俺の呟きは誰にも拾われる事なく空しく尾を引いて消えた。

代わりに、キザ男が言った。

「・・・僕の事は“伊田”と呼んでくれ」

「・・・・・」

「本名じゃないよ。僕は思うんだけどね、誰がどういう目的で僕らをここに連れてきたのかはつきりしない以上、僕らは自分の情報をペラペラとしゃべるべきじゃない」

「サクラは自分の意志で来たとかなんとか言ってたけど・・・」

“伊田”はおいおいといった風に首を振った。

「勘弁してくれよ。なぜ僕達を監禁している人間の話なんか信じなくちゃならないんだ?」

・・・・・

「確かに・・・な

サクラの話を鵜呑みにしている俺が甘いのかもしねない。

でも、根拠はないが、彼女が言った事なら信じられる気がした。

なんでだろうな・・・・・。

あどけない笑顔。

無邪気な声。

死にそうなほど懐かしい日々が、俺の中で駆け巡る。

なのと、その日々の中心にいた人物を、俺は思いだせない。

楽しかった日々はとうに色あせ、後に残っているのは記憶の沼を浮き沈みする切ない思い出のかけらだけだ。

サクラ・・・・・。

何だかもやもやする。

長い間、思に出と共に記憶の沼に沈みこんだままだった俺の心。

久方ぶりに搖さぶられ、動き出した気がした。

そう。サクラによつて・・・・・・。

「私の事は、“ちー”って呼んでくれればいいですっ

くづくづ・・・もとい“ちー”の声で俺の思考は中斷された。

「ちー・・・・ねえ」

伊田が口元を手で押されてゐるのほぼ間違いなく吹き出しちゃうだからだわ。

「え・・・変ですか？ 可愛い名前にしてみたいと思って・・・

しばらく見ていてわかつたが……」いつ、良く言えば純真、悪く言えば少し幼い子っていう典型的なパターンか？

「……まあ、まあいいんじゃないかな。それで……」

伊田とちーが俺の方を見る。

「…………」

うーん。迷うなあ。

まあ、このひのひで適当に考えたほつがいいんだよな大概。

「じゃあ“ケー”で

一瞬間を空けて、

「えー！？それじやちーとそつくりですよー」

「や、君も同レベルだと言うのか！？そんな風には見えなかつたの」

「やかましーわー！」

しうがないだろ。咄嗟にまともな二ツクネームをそれも自分で考えるなんて……。

あ、そうだ。

「じゃあ“圭一郎”で

「圭一郎？ やけに本物臭い名前だな」

「圭一郎さんって本名なんじゃなにですかー？」

「ハツヤ、本名ですかー」

・・・・・

「おーおー。ノリが悪いんだなあ君は」

「圭一郎さんハピエンだとつまんなーい」

まあ、俺はつまらない人間だしな。

正直本名でもそこまで問題ないと思つ。

「じゃあ整理すると、君が“圭一郎”、そこの中は“圭一”、僕は“伊田”、やつきのスーツ着てた子は“サクラ”、あと・・・」

「え？ あと・・・あ

「圭一郎、君の相方が・・・」

「相方じゃねえよー。」

「えっ、今度は圭一郎さんと伊田さんの漫才ですか？ 楽しみですかー？」

いやだから漫才でもないんだけどね・・・。

それから小一時間ほどがアホの搜索に費やされた。

正直面倒くさいので、ガイドとかなんとか言つていたサクラに頼もうかと思つたが、必要以上に姿を見せない方針なのか彼女もどこかへいつてしまつていて見つからなかつた。

結論から言つと、ずっと探ししているのにアホが見つからなくて困つてゐる。

「圭一郎さん。あの人いませんー」

校舎棟の音楽室のような所でアホ探しをしていたらちーが半べそ状態でやつてきた。

「困つたね。もう殆ど調べつくなはづなんだが……」

ほどなくして伊田もやつてきた。

あいつ、どこに行つたんだ？

「まわか、本当に塙を乗り越えて……？」

「や、やめて下さこよう」

「……笑えない冗談だな」

「……」めん

・・・・・

うーん。どうしたものか。

「もへ、あいつを探し始めてからもう二時間は経過している。

まあ今の俺達は殆ど捜索打ち切りのような感じで音楽室でどうだ
しているだけなのだが。

「ビ、ビ、ビ、ビ、ビ、ビ、ビ、

「もへ、彼女が自分で戻つてくるのを待つしかないんじゃないのか
？」

「だよなあ・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・

でも・・・

「でも、そのまま向もしないのもなあ」

「じゃあどうしてこうしてこうなんだい？」

伊田が少しイライラした様子で聞いた。

「…………」

どうするかって聞ひたでしようね俺。

・・・・・

・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・

「あのー……」

ちーが少し控えめな調子で口を開いた。

「私達がここにいるってある人に知らせたらいいんじゃないですか
ね……」

「あ、そつか」

「……それもそつだな」

ちーの的確な一言で沈んでいた場の空気が再び活性化の兆しを見せ始めた。

「でもどうする？……」「こはメガホンなどはないよ」だが

「楽器があるな」

「う。！」は音楽室だ。

「僕には生憎樂器の趣味は……」

「私、カラオケは好きなんですか？」

再び沈ちつとする。「」。

しかし俺には気になつてゐる物があつた。

「……鳴るかな」

蓋をあけ、白と黒の鍵盤を軽く押してみる。

まるでつこわつき調律されたかのような透き通つた綺麗な音色が部屋中に響き渡つた。

そう……ピアノだ……。

「……」

「弾けるのか？圭一郎」

「ええ？圭一郎さんそんな風に見えないのに」

一人の問い合わせている余裕などなかつた。

身を貫いてゆく」の感覚。

数年越しに味わったこの感覚に気を取られていたから。

「・・・・・」

まるで、たるんでいた糸が久々にピンと張るよつこ。

黒い革張りの椅子に腰かけた俺の意識は、ピタッと統一された。

右手はト音。左手はヘ音の弾き出しの位置に。

目の前に並ぶ鍵盤の群れ。

挑むような気持ちで、最初の一音を奏でた。

「・・・・・」

鳴った。

長年使われなかつた神経が再び息吹を取り返したかの如く、脳味噌がフル回転する。

次は、右手でメインの旋律を弾きながら左手は和音を抑えていく。

いつ鳴ったのかも忘れてしまつたよつな、初歩的な曲。

この“異世界”とやらのどこにいても聞こえるよつた半ば暴力的なフォルテシモで、記憶を頼りに鍵盤を叩いた。

「・・・・・」

おかしい。

おかしいな。

こんなに・・・

全ての意識を、田の前の鍵盤に集中させる。

まるで全ての動作をプログラム化されたかの如く、俺の腕や指は勝手に動き、曲を奏でていった。

こんなに・・・楽しいと感じる事が今まであつただろうか？

何年もの間、何もせずに抜けがらのよつに生きてきた俺。

なのに今、こんなにも楽しく、こんなにも熱くピアノを奏でるなんて。

初步的なものだけあって、この曲は数分で終わってしまう。

もつねりやうフィナーレじゃないのか？

そう思つた時だった。

『・・・私は、来るはずもない明日のためにさえ今日とこいつ日を精一杯生きられる人間でありたい』

声が、脳内に響いた。

「え・・・・？」

これは・・・なんだ・・?

さつきと同じ感覚が再び訪れる。

一回目はサクラと初めて会つたときだつた。

これは・・・の記憶は・・・。

俺の記憶にはないはずなのに、なぜ俺の脳内で反響し、俺の心を揺さぶるのか。

疑問と動搖が湧き起こる。

そして次の瞬間。

- !

指がまるでおかしい方向から反発を受けたと思ったら、最後の最後で汚らしい不協和音が鳴り響いていた。

•
•
•
•
•
•

「ええ。圭一郎さんラストで間違えてる」

「またく。恥ずかしいな」

俺は不協和音を奏でた位置から指を離しもせず、考え込んでいた。

なんだか、ここに来てから俺の様子がおかしい。

それもみんな、サクラに関する事ばかりだ。

サクラ・・・

しかし、今までの俺の人生で、サクラのような女の子と会ったような記憶は・・・ない。

ついさっきまで接点のひとつもなかったはずなのに、なぜこれほどにも色々なものがフラッシュバックするんだ？

「・・・・・」

しかし、ただ一つわかつた事がある。

なぜ、俺達はここへ来たのか。

少なくとも俺は、自分の意志でここに来たのかも知れない。

今の俺に足りないもの。

そしていらないと思いこんだ心の底では、取り戻したいと願つてやまないと思つてゐるもの。

・・・はつきりしてゐるぢやないか・・・。

丁度その時、

バタンッ！

音楽室のドアが景気よく開き、

「みんなここにいたの！？」もつ脱出もできないしみんないなくなつてるし死ぬかとおもつたあつ

ようやくアホが戻ってきた。

俺は思考を続ける。

そう。伊田やちーやあのアホ女が今までどんな人生を歩んできたのかは知らないが、俺には欲しいものがある。

「俺は・・・中途半端な自分を・・・ずっとどうにかしたかった」

「・・・・・・・・・・・・

「な、何を言ひてるんだ君は」

「圭一郎さんどうしたんですか？」

「氣でも狂つたの？」

そう。人生の中途で躊躇め、立ちどまつていた。

「なりたかったんだよね。何でもいい。“何か”に対して本氣で向
き合つて生きていける人間に・・・さ・・・・

• • • • • • •

皆が俺の方を見ている。

それこそわけがわからないといったような表情で

俺はかわす最後までい切った

・「理想の自分」。俺はそれを望んでここに来たのかもしれない・・

誰も、何も言わなかつた。

その代わり、誰一人としてわけがわからないといった表情をしなくなつた。

圭一郎

伊田が何かを言おうとして、やめた。

「俺だつてみんなと同じで、こんなとこに突然連れてこられて混乱もしてるし、正直わけがわからないことばつかなんだ」

独白が止まらない。

今まで自己に対してもつっていた、誰にも言えなかつた不満が、一氣

に噴き出すようだつた。

「でも、思つたんだ」

俺は言つた。

「どんな理由であれ、ここが俺に“望むもの”をもたらしてくれるなら、俺はここで精一杯やつてみよう……って」

「ちょっと、待て……」

伊田が口を挟んできた。

「君は大事な事を忘れてる。僕達が何らかの理由で上手い事担がれている可能性だってあるんだぞ?」

「たとえそうでも……」

俺は伊田の方を見た。

「脱出はできない。ここに来た理由も原因もわからない。そしてサクラは強い」

アホがフンッとせっぽを向いた。

「この状況に抗う事はできないんだ。なら今、できる事を最大限やつてみないか?」

「しかし……」

伊田も食い下がる。

俺はたたみこんだ。

「疑うより、まず信じてみよう。……そういうこと何一つ始まらないと思つんだ」

駄目人間の俺が、偉そうに説教をしてしまった。

「ふむう・・・・・」

伊田は黙りこんだ。

「あの・・・・・」

ちーが口を開いた。

「わ、私も、まだ何が欲しくてここに来たのかわかんないんですけど、とりあえず、今ここにいる事を受け入れようかなあ、って・・・」

「

そして俺の方を見てえへへ、と笑つた。

「逃げる事もできないわけですし・・・ね?」

「・・・・・うん」

・・・黒歴史は早く忘れてくれ・・・

「おー、アホ」

「アホって何よー変態！」

「変態じゃねえよ。そろそろお前も名乗れ」

「・・・ああ、“ちー”とか“伊田”とか読んでるのは呼び名なの
ね？そういうえば考えてなかつたわ。どうしてひつかしさ…」

額に手をあててウンウンと考え始めた。

「・・・そんなに真面目に考える事もないんだぞ？」

「あーもう。ひつかいわね。じやあ・・・」

勢いつぽい感じで

「私の事は“マリカ”って呼んでくれればいいわ

案外まともな回答が返つてしましました。

「ようじへむねがいしますっ！マリカさん

「・・・よしへ。マリカ」

「ひつかい呼び名を使つて挨拶する伊田とつー。

俺も

「俺は圭一郎だ。よろしくな、マリカ」

と挨拶したら、

「あなたに呼び捨てしていいなんて言つた覚えはないわつ。 “マリ力さん”って呼びなさいよ」

なんて返事が返ってきた。

構わず

「よひしくな。ま～り～か～」

ふざけた調子で言いながら右手を差し出した。

「・・・・・・・・・・・・」

しばらく交錯する視線。

ついに折れたマリ力は俺の手を握り、

「・・・・・よひしく」

ぼやつと言つて、すぐ手を離した。

脇の一人は、俺達の様子を見て

「・・・なんかいい感じですよね」

「・・・初々しい夫婦漫才だよまつたく」

などと無責任なコメントをしていた。

俺は窓からこゝ、ハーフウェイ・ビレッジの風景を改めて眺めた。

ハーフウェイ・ビレッジ・・・道半ばで立ち往生した者が集う村といふ意味だらうか。

グラウンドが夕日の赤によく映えているが、堀の外の景色は影になつていてよく見えなかつた。

本当に、堀の外は無の世界なのだらうか。

こゝに来てまだ一日田か。

・・・・もう何十時間もいたよつの気がするがね・・・。

まだまだわからない事だらけだが、それでもきっと俺・・・俺達は、何か行動を起こさなければならないのだらう。

今できる事を精一杯やる。月並みだけなかなかできない事だ。

そしてこんな月並みな約束を、俺は過去に誰かとかわした。

そづ、まるで不自然に記憶から抹消されたかのじとく思い出せない

“誰か”と・・・

さつきフラッシュバックの持つ意味が、俺に答えを『えてくれる気がしていた。

サクラが俺にもたらしたフラッシュバック・・・。

「サクラ・・・」

第一章 中途に立たぬまつし者（後書き）

……心でしょ。感想、じ意見などあつまつたら是非お願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9741/>

ハーフウェイ・ビレッジの丘の上で

2010年10月10日00時09分発行